

# 超越するトポス：1830—40年代のペテルブルグ・

## モスクワ比較論について

中村 唯史

### 1. はじめに

1830年代から40年代にかけて、両首都——当時のロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルグと古都モスクワ——のどちらがより重要で意義ある街なのかをめぐって、インテリゲンツィヤのあいだで激しい論争が交わされたことは、ロシア文学史のうえでは比較的良好に知られた事実である。本稿が対象とするのは、この時期に書かれたいくつものペテルブルグ・モスクワ比較論である。

この論争は、ロシアにおいて1810—20年代に形成された「ネーション nation」としての意識と密接に結びついていた。ロシアでネーション意識が確立したのは、1810年代から20年代にかけてというのが定説である。たとえば1812年にモスクワまで侵攻してきたナポレオン軍を、それまで階級間で大きく分裂していた貴族と平民とが連帯し、総力戦で撃退したことをきっかけとして、ロシア人としての一体感が醸成されたという意見は、現在でもよく耳にする。ロシアにおけるネーション意識の形成という長期にわたる複雑な過程の原因を、ナポレオン軍の侵攻という多分に偶然のできごとだけに求めようとするのにはやや無理があるが、少なくともインテリゲンツィヤのアイデンティティの重心が、この時期に従来の「帝国臣民」や「正教徒」といったものから、「ロシア人」へと決定的に移行したことはまちがいない<sup>1</sup>。

「ロシア人」としての自覚を強く持つようになった1830年代以降、インテリゲンツィヤがモスクワとペテルブルグのどちらが優れた街かという議論に熱中したのは、もちろん単なるお国自慢や好みの問題ではなかった。次章以降に見るように、この論争における両首都の表象は、ロシアが過去にたどってきた歴史をどう評価するかという問題と不可分の関係にあった。

ロシア人としての自己意識を持つようになったインテリゲンツィヤは、この時期、自分たちが属しているのがどんな国なのか、また今後どのように発展するべきかについて思索するようになった。彼らは、西欧型の発展を近代化の唯一の道筋と見なし、ロシアも同じ道を進むべきだと考える西欧派 *западники* と、ロシアは西欧とは異なる社会原理に基づく国であり、独自の発展形態を模索すべきであるとするスラヴ派 *славянофилы* とに分かれて、論争をくり広げた<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> この時期にロシアで形成された「nation」としての意識が、西欧諸国や日本において形成されたような「民族」意識に相当するものかどうかについて研究者の見解は一致していない。本稿ではこれを「ネーション」と表記する。

<sup>2</sup> 西欧派とスラヴ派の関係についての本稿の記述は、便宜上やや図式的である。両者の必ずしも対立的とばかりはいえない関係については、セルゲイ・レヴィーツキイ『ロシア精神史：哲学と社会思想の流れ』（高野雅之訳、早稲田大学出版部、1994年）ほかを参照せよ。

ロシアの現状認識と展望をめぐるこの論争において、現在と未来の土台である過去をどう評価するかが問題となったことは、自然な流れであっただろう。本稿で触れる論考はどれも、ロシアの歴史（あるいはその欠如）が両首都に具現しているかのようなレトリックにおいて共通している。「モスクワ」「ペテルブルグ」というトポスは、西欧派—スラヴ派論争の焦点であり、これまでにロシアが経てきた時間に対する両派の評価が、空間的な文脈で表出されたものだった。共同研究「近代世界文学におけるロシア表象の研究」の一環である本稿で19世紀前半のペテルブルグ・モスクワ比較論争を取り扱うのは、論争における両首都のトポスが、ロシアの過去・現在・未来に対する当時の認識——言い換えれば近代ロシアの自己イメージの凝縮された表現だったからである。

モスクワとペテルブルグの歴史や、文学等における両首都の表象については、日本でもすでにかかなりの研究の蓄積がある<sup>3</sup>。本稿では、それら既存の研究成果を前提としたうえで、対象を1830—40年代の両首都比較論の典型的な論考に限定し、テキスト内でモスクワとペテルブルグにどのような位相が付与されているのかを検討していく。

あらかじめ言っておけば、西欧に対するロシアの独自性を重視するスラヴ派は、外敵の侵入に対して歴史上くり返し抵抗と反攻の拠点となり、15世紀から17世紀までは首都でもあったモスクワの方を高く評価した。これに対して西欧派は、近代化を志向したピョートル1世の強権によって18世紀初頭にバルト海に面した北方の沼沢地に突如建設され、新たな帝国の首都となったヨーロッパ風の外観を持つ計画都市ペテルブルグを擁護した。

このようにスラヴ派の場合も西欧派の場合も、結論それ自体はごく当然すぎるものと言わなければならない。だが重要なのは結論よりも、むしろそこに至る過程での論理やレトリックの方である。本稿では、論争において両派がそれぞれ擁護した街をどのように描きだそうとしたのかを、スラヴ派のモスクワ表象と西欧派のペテルブルグ表象とに重点を置いて考察していく。

## 2. スラヴ派のモスクワ表象

帝国の首都ペテルブルグに対する古都モスクワの優越を主張したスラヴ派は、その論考においてモスクワをどのように表象したのだろうか。ここでは晩年の叙情詩や連作小説『現代の英雄 Герой нашего времени』（1839-40）などで知られるミハイル・レールモントフ（Михаил Лермонтов, 1814-41）の散文『モスクワの眺望 Панорама Москвы』（1834）を見ることにしよう。

レールモントフをスラヴ派と呼ぶことは、やや躊躇されるかもしれない。たしかに、若くして死んだレールモントフは、生前にスラヴ派としての旗幟を鮮明にしたことはなかった。だが一時期ペテルブルグ大学東洋学部に在籍し、後には流刑となったコーカサスの地を舞台とする作品を数多く残したこの詩人が、西欧化こそがロシア

<sup>3</sup> 代表的なものとして、川端香男里『薔薇と十字架：ロシア文学の世界』（青土社、1981年）、木村浩『モスクワ：世界の都市の物語11』（文藝春秋、1992年）、土肥恒之『ピョートル大帝とその時代：サンクト・ペテルブルグ誕生』（中央公論社、1992年）、大石雅彦『聖ペテルブルグ』（水声社、1996年）、望月哲男「ペテルブルグ文学」、『スラブの文化：講座スラブの世界①』（弘文堂、1996年）183—210ページ、小町文雄『サンクト・ペテルブルグ：よみがえった幻想都市』（中央公論新社、2006年）、望月哲男編著『創像都市ペテルブルグ：歴史・科学・文化』（北海道大学出版会、2007年）など。

の進むべき道であるとの見解に組していなかったことは、すでに定説である<sup>4</sup>。

『モスクワの眺望』は、レールモントフが騎兵士官学校に在籍していた20歳のときに書かれた<sup>5</sup>。モスクワの中枢クレムリンの敷地内にあって、当時この街で最も高い建物だった通称「イワン大帝の鐘楼」からの眺望を記述したというコンセプトのこの文章は、ペテルブルグとの潜在的な対比のもとにモスクワを称揚する意図に基づいて書かれている。

冒頭部を以下に引用する。

イワン大帝の鐘楼に上がり、われらが古都を端から端まで一望の下に見渡す機会に恵まれたことのない者、この壮麗でほとんど果てしない眺望に見とれた経験が一度もない者には、モスクワは理解できない。なぜならモスクワは他にも幾千とあるような、ありふれた大都市ではないからだ。モスクワはシンメトリカルに配置された大量の冷たく物言わぬ石の堆積ではない……いや、とんでもない！モスクワにはそれ自身の魂、それ自身の生命が宿っている。古代ローマの墓地のように、その（モスクワの）石ひとつひとつが、時と運命によってきざまれた碑銘、庶民には理解できないが学者や愛国者や詩人にとっては豊饒で、さまざまな思いと感情と靈感に満ちた碑銘を刻んでいる！それ（モスクワ）は大海と同じように、自身の言葉、力強く響きわたる聖なる祈りの言葉を有している！<sup>6</sup>

モスクワ大公国を代表する皇帝イヴァン4世（雷帝）が建造したと伝えられる鐘楼の高みに上り、過去の記憶（「碑銘」）が堆積しているモスクワの全景を俯瞰するというコンセプトは、ミハイル・ロモノーソフ(Михаил Ломоносов, 1711-65)など18世紀ロシアの宮廷詩人が帝国の歴史と栄光を讃えるために書いた頌詩（オード）の型を、散文に移植しようとした試みとして理解できるだろう。18世紀の頌詩では、叙情的「私」が神意や靈感に導かれつつ垂直に上昇を開始し、その動きにつれて重要な歴史的事件がパノラマとなって水平的に展開していくという構成が一般的だった<sup>7</sup>。19世紀前半の叙情的「私」はすでに神意には導かれず、ただ単に鐘楼に上がるだけ、時間を超越するのではなくモスクワを俯瞰するだけではあるが、街自体が過去の記憶を内包しているため、帝国の歴史を俯瞰するという頌詩の伝統を受け継いでいるかたちである。

「モスクワはシンメトリカルに配置された大量の冷たく物言わぬ石の堆積ではない」という記述は、暗にモスクワとペテルブルグとを対置している。帝国の首都となるべく、この文章の書かれる130年前に建設が始まった計画都市ペテルブルグは、直線やシンメトリーを基本とする西欧風の街並を誇っていた。レールモントフは言外に、整然として美しいが歴史の浅いペテルブルグ（「シンメトリカルに配置された大量の冷たく物言わぬ石の堆積」）を斥け、ロシアの過去の痕跡を刻んでいるモスクワの優位を示唆したのである。

歴史とのつながりは、モスクワが「古代ローマの墓地のように」と、ローマと連想づけられることによって、

<sup>4</sup> см: Ю. М. Лотман: Проблема Востока и Запада в творчестве позднего Лермонтова, Ю. М. Лотман: избранные статьи о трех томах. том III (Александра, 1993), с. 9-23.ほか。

<sup>5</sup> М. Ю. Лермонтов: собрание сочинений в четырех томах. том IV (Ленинград Наука, 1981), с.470.

<sup>6</sup> 『モスクワの眺望』のテキストは там же, с. 335-339 に拠る。引用部の翻訳は著者による。

<sup>7</sup> see: Harsha Ram, *The Imperial Sublime: A Russian Poetics of Empire* (The Univ. of Wisconsin Press, 2003).

いっそう強調されている。レールモントフはこの比喻によって、「モスクワ第三ローマ説」——モスクワを、第一のローマ（古代ローマ帝国の首都）、第二のローマ（ビザンチン帝国の首都）に続いて、正しい信仰（すなわち東方正教）を保持・繁栄させていく歴史的使命を帯びた第三のローマであると見なす古くからの理念——を暗示しているのである<sup>8</sup>。

「モスクワにはそれ自身の魂、それ自身の生命が宿っている」などの記述によって、モスクワが生命体に喩えられていることにも留意すべきだろう。当時のインテリゲンツィヤのあいだでは、「合理性」「機械性」といった属性を西欧に付与し、ロシアの「自然」「生命力」をこれに対置するレトリックが広く用いられていた。このことを考慮するなら、ペテルブルグに「西欧的」な属性を付与し、いっぽうモスクワに「ロシア」との有機的な連関を認めて、後者を礼賛しようとしたレールモントフの意図は明らかである。別の箇所では、モスクワの古くからの建物が「東洋風の壮麗や中世の息吹きをまとった建築群」と形容されている。レールモントフは「非西欧性」に留まらず、ロシアが内包している（と彼が信じようとした）「東洋」的な要素をも積極的に評価していた。

モスクワの「非西欧性」は、赤の広場にある聖ヴァシリイ寺院の描写でも強調されている。

それ（聖ヴァシリイ寺院）は古代のバビロンの塔さながらにいくつかの陥没と隆起からできていて、それらの凹凸がさらに虹色でぎざぎざの巨大な円屋根へと続いている。円屋根は（もしこのような喩えが許されるならばの話だが）、古代に作られた首の長いビンの磨き上げられたガラス製の栓にととてもよく似ている。円屋根のまわりには、その隆起と陥没の一つ一つに、さらに無数の副次的な円屋根が散りばめられていて、それらのどれ一つ取ってみても互いにまったく違った形をしている。このように円屋根が、建物のいたるところに、シンメトリーも秩序もなく散りばめられているそのさまは、まるで根がむき出しになった老樹の幹に生えている新芽のようだ。

聖ヴァシリイ寺院は、ロシア帝国の原型となったモスクワ大公国の栄光を象徴する建造物だが、レールモントフは、それが「シンメトリー」や「秩序」といった西欧的な美の規範に合致しないことを、くどいほどに強調している。そしてそのような寺院の外観を、「まるで根がむき出しになっている老樹の幹に生えた新芽のよう」と、植物になぞらえているのである。

この比喻はまた古都モスクワがなお秘めている生命力、その復興への期待をも示唆しているだろう。レールモントフは、モスクワとモスクワが内包している「ロシア的原理」の復活のきざしを、この街で最近起きた歴史的事件に見いだしている。

それ（クレムリン）はロシアの祭壇である。クレムリンには祖国に値する生贄が供されなければならない。いや、すでに多くの生贄が供されてきたのだ……クレムリンが、あの伝説のフェニックスさながらに、燃え上がる灰燼の中から甦ったのは、それほど昔のことだったろうか？！

<sup>8</sup> モスクワ第三ローマ説については、栗生沢猛夫「モスクワ第三ローマ理念考」、金子幸彦編『ロシアの思想と文学：その伝統と変革の道』（恒文社、1977年）9-61ページに詳しい。

ナポレオン軍が1812年にモスクワに侵攻した際に、クレムリンのイコンや建物に火を放ったことはよく知られている。モスクワからもさらに撤退したロシア軍は、同年冬にはゲリラ戦術を主とする反攻に転じてナポレオンの連合軍を壊滅に追い込み、その没落のきっかけを作った。引用の記述はこの歴史的事実を踏まえている。

モスクワの「東洋性」を強調し、これをナポレオンに代表される「西欧」に対置するかのような『モスクワの眺望』のレトリックは、対ナポレオン戦争前後のロシア社会の一大パノラマを描き出したレフ・トルストイ(Лев Толстой, 1828-1910)の大作『戦争と平和 Война и мир』(1864-69)を髣髴とさせる。もっとも、『モスクワの眺望』はレールモントフの生前に発表されることはなく、1891年まではその存在さえ知られていなかったため<sup>9</sup>、両作品のあいだに直接の影響関係を想定することはできない。だが、このことはかえって、『モスクワの眺望』に記されているような街の属性(非西欧性、東洋性、生命力、ロシアとの有機的連関等)への理解が、近代ロシアのインテリゲンツィヤに広く共有されていたことを示しているのである。

### 3. 西欧派のペテルブルグ表象

ロシアの進むべき道はピョートル1世によって18世紀初めに着手された近代化の加速よりほかにはないと考えていた西欧派インテリゲンツィヤが、ピョートルが礎を築いた街、西欧化の象徴ともいうべきペテルブルグを積極的に評価したことは言うまでもない。だがその評価は、レールモントフのモスクワの場合などとは異なり、やや複雑で屈折したかたちを取っていた。

ここでは、専制批判の罪で流刑を経験、その後西欧に亡命し、雑誌「鐘 Колокол」を発行しては秘密裏にロシアに送り、国内の進歩的反体制派に強い影響を与えた思想家・作家アレクサンドル・ゲルツェン(Александр Герцен, 1812-70)のエッセイ『モスクワとペテルブルグ Москва и Петербург』を取り上げることにする。これは流刑地ノヴゴロドで書かれたもので、完全なかたちで活字となったのは著者の亡命後、上記『鐘』誌1857年8月号が最初だが、すでに1842年の執筆直後からロシアのインテリゲンツィヤのあいだで広く書写・回覧されていたことが知られている<sup>10</sup>。

まず冒頭部を見てみよう。

現在のロシアについて語ること——それは、ペテルブルグについて、あらゆる面で歴史を持たないこの現在の街、ロシアと呼ばれる地球上の広大な部分を占めている地域の現代的・現世的な欲求に活発に応えている唯一の街について語ることにほかならない。モスクワは、ペテルブルグとは反対に、過去の日々との偽りの結びつきに惹かれている。モスクワは過ぎ去りし栄光の記憶を保ち、常に後ろ向きで、ペテルブルグの動きに魅せられながらもこれに背を向け、背後に忍び寄っているヨーロッパ的原理に目

<sup>9</sup> Лермонтов: там IV, с. 470.

<sup>10</sup> А. И. Герцен: собрание сочинений в тридцати томах, том второй (Изд-во АН СССР, 1954), с. 439.

を向けようもしない。いっぽうペテルブルグの生活は、ただ現在のうちにだけある。この街には、ピョートル 1 世よりほかには思い出すべき何もない。歴史もなければ未来もない。ペテルブルグは毎年秋になると疾風を待ち、疾風はこの街を水の底に沈めてしまうのである。<sup>11</sup>

歴史を持たず現在に生きる街、ヨーロッパ的原理に基づく街としてのペテルブルグと、ロシアの過去の記憶が強いあまりにヨーロッパ的原理に背を向けているモスクワとの対比という図式は、前節で見た『モスクワの眺望』の場合と基本的には同一である。ただしレールモンツフの文章においては示唆されているだけだった多様な事象を、ゲルツェンは冒頭から明示的に文中に導入している。

ゲルツェンが、ピョートル 1 世とペテルブルグとの結びつきを強調していることは、とくに重要である（「この街には、ピョートル 1 世よりほかには思い出すべき何ものもない」）。豊かな文学的才能に恵まれながらも、あくまでも政治思想家として活動しようとしたゲルツェンにとって、ペテルブルグという街の評価は、この街を生んだピョートル 1 世の改革に対する評価と不可分だった。

引用の末尾の一文は、ネヴァ河畔の沼沢地に建設されたペテルブルグが、秋になるとしばしば洪水に見舞われ、大きな被害を出していた事実を踏まえているが、それまでの文意と照らし合わせるなら、やや唐突であるとの印象は否めない。ペテルブルグに歴史がないということと、この街が洪水に襲われるということとのあいだに、論理的な関連は必ずしも認められないからだ。

『モスクワとペテルブルグ』では、街が置かれている環境（地理・気象）、街の掘って立つ思想ないし原理、街の歴史（あるいはその欠如）という三つの文脈がたがいに分かちがたく結びつき、ほとんど渾然一体となって街の表象を形作っている。その筆致は学術的という以上にイメージに依拠して詩的であり、その展開は論理的というよりも、むしろメタフォリカルである。

このような特徴が最も鮮明に表れているのは、次に引用する箇所だろう。

（ペテルブルグの営みをどんなに仔細に観察しようとしたところで）この街は、あいかわらず謎のままであった。そして遠くから見えないようにとの配慮から、神が 1 年中この街に霧のとばりを下ろし、その霧のなかに街全体が消失し始めた今となっては、私は、物理的にも倫理的にもあらゆる矛盾と対立に基づくこの街、ペテルブルグという謎めいた存在を解き明かす手がかりさえ得られないだろう。……とはいえ、このこと自体が、ペテルブルグの現代性の新たな証である。なぜならピョートル 1 世以後のわが国の歴史のすべて、私たち現代人の生活そのものが、謎でなくて何であろうか。……たがいに反目する諸々の力、相矛盾する諸傾向から成るこの多様な原理の渦巻くカオス。ここでは何かヨーロッパ的なものが顔を出し、闊達で人間的なものが芽生えたとしても、やがて保守的で消極的なスラヴ人気質という名の沼地か、……墓場の湿った土の下から最近はい出してきた選民意識という名の凶暴な波の底に沈んでしまう。

<sup>11</sup> 『モスクワとペテルブルグ』のテキストは *май же*, c.33-42 に拠る。引用部の翻訳は著者による。

北方の河口付近に位置しているために霧や霽が立ち込める日が多いという気象条件が、ペテルブルグに渦巻く「矛盾と対立」を語る前提となっている。もともと沼地だった地盤の陥没やネヴァ河の氾濫によって、瀟洒な西欧風の街並がたえず脅かされているというペテルブルグの地理環境が、「保守的で消極的なスラヴ人氣質」「選民意識」<sup>12</sup>と「ヨーロッパ的なもの」「闊達で人間的なもの」との葛藤という思想状況に重ね合わされている。だが、このように極めてレトリカルな文章であるにもかかわらず、上に引用した2箇所の論旨を整理するならば、以下のようになりに明快な二項対立が浮かび上がってくる。

ヨーロッパ的原理	モスクワ
ヨーロッパ的なもの	保守的で消極的なスラヴ人氣質
闊達で人間的なもの	選民意識
ペテルブルグ	沼地 凶暴な波

ゲルツェンがこの文章を書いた1840年代のロシアの思想状況を考慮するならば、この表の左諸項が「文明」と結びつき、いっぽう右側の諸項が「野蛮」「自然」と結びついていることは明らかである。

西欧派のゲルツェンは、いうまでもなく「文明」の側に立つ。そのことが明確に表れているのは、ピョートル1世の事業に関する次のような記述である。

ロシアにとって唯一の救いがロシア人であることを止めることだとピョートルが気づいた日、彼が断固として私たちを全世界の歴史に組み入れたその日から、ペテルブルグの不可欠性とモスクワの不要性が決定的となったのである。ピョートルの第一歩は、必ずやモスクワからの遷都でなければならなかった。ペテルブルグの基石が置かれた日から、モスクワは副次的な街となり、それまでロシアに対して有していた意義を失い、無意味で空虚な時を送るようになった……

この引用では、モスクワとペテルブルグが対照的に描かれているが、それはそのまま、各々の街が象徴するピョートル以前の古きロシアと、ピョートル以後のロシアとの対照でもある。ゲルツェンは他の箇所でも、モスクワについて「これはロシアの富める村が巨大に発展したものと言うよりほかはない」とも述べている。ゲルツェンはレールモントフと同じくモスクワと伝統的ロシア、ロシアの過去との有機的な結びつきを認めていたが、ただしそれに対する評価は、スラヴ派の心情のレールモントフとは正反対であった。

いっぽうペテルブルグと、この街が象徴する理念は、ロシア的原理やその過去とのつながりを決定的に欠いているとゲルツェンは言う。

<sup>12</sup> 「最近はい出してきた選民意識」という表現は、直接にはゲルツェンにとっての論敵スラヴ派を諷しているだろう。だが、「選民意識」それ自体は、政教一致を原則とする東方正教会を奉じるなかで、1453年のビザンチン帝国の滅亡以後ほとんど唯一国家を維持してきたロシアの共同幻想とも言うべく、近世以降近代に至るまでロシアでは根強いものがあつた。すでに言及した「モスクワ第三ローマ説」はその一例である。ロシアにおける選民意識とその近代における表れについては、高野雅之『ロシア思想史：メシアニズムの系譜』（早稲田大学出版部、1998年）ほかを参照せよ。

ペテルブルグは成り上がり者だ。何世紀にもわたる聖なる記憶を持たないこの街は、自分を沼の底から呼び起こした国との心からの結びつきを失っている。……根なし草であり、何十万の労働者の骨を杭として、それ自身の足で屹立している街である。

最後の文は、ペテルブルグ建設に10万人とも50万人ともいわれる人的犠牲が伴った史実を踏まえており、ピョートルによって幽閉された皇妃アヴドーチナヤの言葉として民間に広く流布していた「白骨の上に建てられたこの街はやがて空虚になるだろう」という予言<sup>13</sup>を下敷きにしている。ピョートルによって「西欧への窓」として建設されたペテルブルグが、モスクワが固く結びついているロシア本来の伝統や過去とは完全に断絶しているというこの記述において、ペテルブルグとモスクワの対立は、ペテルブルグとロシアとの対立へと転化している。

それでもゲルツェンは、たとえ多大な犠牲の上に成り立っている「醜悪」な街であるにせよ、あくまでもモスクワではなく、ペテルブルグの側に立つ。こうして最終的にはペテルブルグは、野蛮で停滞する祖国ロシアと、周囲の自然に脅かされつつ、「文明」への道をひた走る悲劇的な街として形象されることになる。

ペテルブルグの運命には、なにか悲劇的で陰鬱で壮麗なものがある。それは、体内にエネルギーと残酷さの充満した北方の巨人の息子である。ツァーリの愛するこの息子は、祖国のために祖国から切り離され、ヨーロッパ主義と文明の名において祖国を抑圧してきた。ペテルブルグの空は永遠に灰色である。良き人にも悪しき人にも照り輝く太陽は、ただペテルブルグにだけは輝こうとしない。沼地の土壌が湿気を吹きかけ、海辺の湿った風が街路を吹きぬけていく。くり返すが、この街は毎年秋になるごとに疾風を待ち、その疾風はこの街を水の底へ沈めてしまうのである。

ペテルブルグを評価するゲルツェンだが、それはこの街が美しく快適だからではなく、むしろ「祖国のために祖国から切り離され……祖国を抑圧」というその「悲劇的」な宿命のゆえにである。ペテルブルグは「陰鬱」だが、「ヨーロッパ主義と文明」をめざすよりほかに進むべき道はない。ゲルツェンは、ペテルブルグにいと「悲しい物思いにしばしば捉われ」、「重苦しい疑惑に押しつぶされそうになり」、「ほとんど絶望に近い気持ちに陥る」が、「正にこうした思い出のゆえにこそ、私はペテルブルグに恩義を感じ、この街を愛している」と述べ、この論考を締めくくっている。

#### 4. 超越するトポス

1840年代のロシアの文芸批評で指導的な役割を果たしたヴィッサリオン・ベリンスキイ(Виссарион Белинский, 1811-48)の論考『ペテルブルグとモスクワ *Петербург и Москва*』(1845)は、反専制・西欧派という信条の近さ

<sup>13</sup> 望月哲男、前掲論文、187-188ページ。



もあって、地理・気候、原理・思想、歴史という三つの文脈の融合、二項的な論理展開など、多くの点でゲルツェンの論考によく似ている。ただしゲルツェンの場合には巧みなレトリックの陰に隠れて目立たなかった、ある論理的な飛躍が、やや文彩を欠いて一本調子なベリンスキイの論考の方では顕在化している。西欧派のペテルブルグ表象における論理的な飛躍とはどのようなものか。その定位を目的として、ベリンスキイの論考を概観してみよう。

レールモントフやゲルツェンと同様、ベリンスキイもまたモスクワに「過去」「停滞」といった属性を付与している。

モスクワの曲がりくねって歪んだ街路を一時間でも歩いてみれば、ここが家父長制的な家族性の街であることがすぐにわかるだろう。……まるで自分がどこか東洋の街に迷い込んでしまったような気がするだろう。……ほとんどどこにも街らしさは感じられない！<sup>14</sup>

熱狂的な西欧化主義者だったベリンスキイにとって、「東洋」とは正に「停滞」の代名詞にほかならなかった。モスクワは、その外観においても（「曲がりくねって歪んだ街路」）、その拠って立つ原理においても（「家父長制的な家族性の街」）、あまりにも東洋的、すなわち停滞した街である。モスクワを首都としていた時代（つまりピョートル以前）のロシアについて、ベリンスキイは別の箇所ですでにヨーロッパの諸国家とあまりにも対照的な存在となってしまう、そのアジア的構造の錆びついた車輪では、これ以上もう一歩も前に進めないような状態に陥っていた」と述べている。ベリンスキイにとって、モスクワとは「東洋的」「アジア的」だったロシアの過去と分かちがたく結びついたその代名詞であった。

上の引用において、「東洋」や「家父長制」に対置されているのが「街」である。この対置においては「街」こそが優越しなければならない。その理由をベリンスキイは次のように説明している。

賢人たちは幾世紀にもわたって、村の鍛冶屋の粗雑な手になる鉄釘の方が、自然によって作り出されたどんな花々よりも価値があると語ってきた。それは鉄釘が意識的な精神の所産であり、いっぽう花々が「天心爛漫な」力の産物であるという意味においてなのである。……街の特徴がいったい何かといえば、それはまず第一に、あらゆる機能が狭い地域に間断なく集中していることに求められなければならない。この意味ではペテルブルグはモスクワよりもはるかに街であり、ひょっとすると、すべてが拡散し、分断され、家族性の刻印を押されているロシアにおいて、唯一の街であるとさえ言えるかもしれない。

「街」が優越すべきであるのは、機能性・合理性に勝っているからである。この意味で人間の「意識的な精神の所産」は、たとえ粗雑で美しさを欠いていようと、「天心爛漫な力」すなわち「自然」の産物よりも価値があ

<sup>14</sup> 『ペテルブルグとモスクワ』のテキストは *В. Г. Белинский: полное собрание сочинений том VIII* (Изд-во АН СССР, 1955), с.385-413 に拠る。引用部の翻訳は著者による。

る。このような揺るがぬ確信に基づいて、ベリンスキイはモスクワを「自然」の側に追いやり、ペテルブルグをロシアにおける唯一の「街」として認定する。

このようなベリンスキイの論理において、「唯一の街」ペテルブルグこそが、「自然」との闘争から作り出された、人間の「意識的な生産の所産」として表出されるのは、きわめて理に適ったことである。

ピョートルはペテルブルグを自分の創造物と見なし、これを自分の創造的知性の子供として愛していた。ひょっとすると彼自身にも、荒涼として人間の居住地から遠く離れたこの場所で、荒々しく凶暴な自然や、沼地のような土壌や、湿って不健康な気候と闘うことが、困難で絶望的に思われたときが一度ならずあったかもしれない。……だが一人の人間の意志が自然そのものに勝利した。それはあたかもあらゆる可能性に反して、自然と気候の面で人間に対して非友好的で敵意を秘めたこの地域にロシア帝国の首都を置くことを、運命それ自体が願ったかのようにであった。

この引用における「自然」は、「美しい花」ではなく、ペテルブルグ周辺の「人間に対して非友好的で敵意を秘めた」自然である。ペテルブルグ建設は何よりもまず、このような「自然」に対するピョートル1世の「意志の勝利」とされている。

ベリンスキイの論考には、3年前に書かれたゲルツェンの論考の影響があきらかに認められる。ただしペテルブルグとロシアの断絶・対立を強調したゲルツェンに対し、ベリンスキイにおいてはこの対立が背後に退き、むしろピョートルと自然との相克の方が前景化していることには、留意する必要がある。

ここまで見たベリンスキイの主張を整理するなら、次のようになるだろう。

ペテルブルグ	モスクワ＝ロシア
街	家父長制、東洋的、アジア的
精神の所産、人間の意志	自然
ピョートル	非友好的で敵意を秘めた地域 (荒々しく凶暴な自然、沼地のような土壌、湿って不健康な気候)

この明快な二項対立は、しかし実はすでに冒頭近くの記述で、対立する二項が止揚するように、あらかじめ仕組まれている。

(モスクワ) 大公国は滅びねばならず、しかしロシアの民衆は生き続けなければならなかった。偉大な未来が彼らを待っていたからである。そこで神は彼らに、ロシア人をヨーロッパと結びつける使命を担った天才を賜ったのだ。……ピョートルの献身ぶり、巨大な背丈、おそるべき創造的知性と実行への意志を秘めた、誇り高く偉大な容姿——ピョートルのこうしたすべては、彼が生まれた国と彼が創り

出すべく召命された国民の姿、かぎりなく広大だが当時はまだ有機的によく統合されてはいなかった国と、当時はまだ自分たちの偉大な未来へのかすかな予感しか持っていなかった偉大な民の姿にさも似ていた。

ベリンスキイの描くピョートルは、「東洋的」「アジア的」な「ロシア」や「自然」と戦い、その「精神・意志の所産」としてペテルブルグという「西欧的」な「街」を作り出すことに成功した。しかしベリンスキイは同時に、そのようなピョートルが「ロシア」の「姿にさも似ていた」とも強調しているのである。

事実上ピョートルとロシアと同一化するこの記述のために、ベリンスキイの論考には、論理的にはやや奇妙な事態が生じている。つまり「ロシア」が、対立する二項の一方に属しているそのまま、この二項対立の起源ともジンテーゼともなり、二項対立それ自体をみずからの内に包摂してしまっているのである。

ベリンスキイの論考において、「ロシア」の位相は次のようなものだ。それは「東洋的」「アジア的」「自然」とともに、「人間の意志」「精神の所産」である「街」を作り出したピョートルと相同的でもあり、つまり二項式の両側に遍在している。言い換えれば、「ロシア」は先の表に整理したような二項対立の一方に属しているそのままに、二項対立それ自体を内包して、二項対立が生じる場そのものと化してもいるのだ。ベリンスキイにおいて「ロシア」は二項式の一項であり、かつまた二項式に対して超越してもいるようなトポスなのである。

いうまでもなく、この超越は論理的には説明できない。ベリンスキイはむしろ「ロシア」という語およびイメージの固有性を梃子にして、これを二項式に対して内在させたり、あるいは超越させたりを自在に行っているのである。

本稿において取り上げてきた他の論考においてはどうか。レールモントフの場合には、「ロシア」も「モスクワ」も超越するトポスではない。それはあくまでも「西欧」や「ペテルブルグ」と対峙するものであり、二項式の一方に属しているだけである。もちろんスラヴ派に近い信条の持ち主だった彼は、「ロシア」や「モスクワ」の方に共感を寄せていたけれども、希求していたのはあくまでもロシアが西欧化ではない独自の道を歩み、モスクワがペテルブルグに対する優越を獲得することだった。つまりレールモントフが願っていたのは対立する二項間の力関係の逆転であり、二項式それ自体を超越しようとする意志はなかったのである。

ゲルツェンの場合にはどうか。もう一度次の箇所注目してみよう。

……たがいに反目する諸々の力、相矛盾する諸傾向から成るこの多様な原理の渦巻くカオス。ここでは何かヨーロッパ的なものが顔を出し、闊達で人間的なものが芽生えたとしても、やがて保守的で消極的なスラヴ人気質という名の沼地か、……墓場の湿った土の下から最近はい出してきた選民意識という名の凶暴な波の底に沈んでしまう。

本稿でこれまで整理してきたところを多少表現を変えてくり返すなら、ゲルツェンにおいてペテルブルグは、モスクワとロシアという「カオス（自然、スラヴ人気質）」に対峙して、「コスモス（人為、ヨーロッパ的原理）」を代表するものだった。つまりペテルブルグは二項対立の一方に属するものだった。

ところが上の引用部では、ペテルブルグは、これら二項が反目し、葛藤する場それ自体にほかならない。つまり「ペテルブルグ」というトポスは、「カオス」に対峙する「コスモス」であるそのまま（あるいは「コスモス」であると同時に）、「カオス」と「コスモス」のレベルを超越してもいるということになる。ゲルツェンが「カオス」と「コスモス」の相克の場を「カオス」と呼んでいるので話はややこしいが、彼においては「ペテルブルグ」は、対立する二項式の片方に内在し、かつ二項式を超越しているようなトポスなのである。

少なくとも両首都比較論を見るかぎり、スラヴ派の言説に超越への志向は稀薄である。スラヴ派が「モスクワ」や「ロシア」に託していたのは、奪冠への期待であって、超越への意志ではなかった。「ロシア」や「ペテルブルグ」というトポスが、超越の契機をはらんでいるのは、むしろ西欧派の言説の方であったように思える。

## 5. 結論に代えて：「超越するロシア」の表象

本稿ではここまで、1830-40年代に書かれた3つの論考——レールモントフ『モスクワの眺望』、ゲルツェン『モスクワとペテルブルグ』、ベリンスキイ『ペテルブルグとモスクワ』——を概観してきたが、見解や立場の相違を超えて三者に共通しているのは、論理的ではなく過剰なまでに理念的な、ほとんど神話的と呼んでも良いような思考だろう。ゲルツェンの際にすでに指摘したことだが、これらの論考では、地理・気象条件、思想・原理、歴史など、近代的な機制ではふつう別々の連関に分類されるような事象が渾然と結びついており、しかもその際の結びつき方はイメージに依拠した転調とも言うべく、きわめて比喩的である。

なかでも、西欧派に分類されるゲルツェンとベリンスキイのペテルブルグ表象は、近代ロシア文学の最大の主題だった所謂「ペテルブルグ神話」の一翼を成している。伝統的にジャンル間の敷居が低いロシアにおいて、インターテクスチュアリティは、ジャンルの異なる言説のあいだでごく普通に見られる現象だった。

「ペテルブルグ神話」もその例外ではない。たとえばゲルツェンの論考に「白骨の上に建てられたこの街はやがて空虚になるだろう」という口承を踏まえた記述があることはすでに指摘したが、ベリンスキイの「ピョートル」対「敵意を秘めた自然」という図式には、ささやかな幸福を願っていたペテルブルグの一市民が、ピョートル1世像と洪水との相克の狭間で破滅していく物語、アレクサンドル・プーシキン（Александр Пушкин, 1799-1837）の叙事詩『青銅の騎士 Медный всадник』（1833）という先駆があった。

これとは逆に、ゲルツェンやベリンスキイの言説も、他の作家の文学作品に大きな影響を及ぼした。たとえばゲルツェンの論考は、すでに述べたように筆写によって当時のインテリゲンツィヤに広く読まれたが、1840年代の終わりにはユートピア社会主義グループ「ペトラシェフスキイの会」でも高く評価されていた<sup>15</sup>。この会に当時参加していた作家フォードル・ドストエフスキイ（Федор Достоевский, 1821-1881）が、『弱い心 Слабое сердце』（1848）、『詩と散文によるペテルブルグの夢 Петербургские сновидения в стихах и в прозе』（1861）、『未成年 Подросток』（1875）などの作品で、霧に覆われたペテルブルグが霧の晴れるとともに蒸発して消え失せてしまうという幻想をくり返し語るようになった直接の源泉が、すでに引用したゲルツェンによる「霧のなかに街全体

<sup>15</sup> Герцен., там второй, с. 439.

が消失」するイメージだった可能性は高いのである。

どうだろう、この霧が散って上空へ消えてゆくとき、それとともにこのじめじめした、つるつるすべる都会全体も、霧につつまれたまま上空へ運び去られ、煙のように消えてしまって、あとにはフィンランド湾の沼沢地が残り、その真ん中に、申し訳に、疲れきって火のような息をはいている馬にまたがった青銅の騎士だけが、ポツンと残るのではなかろうか？<sup>16</sup>

北方の沼地に突如建設された首都をめぐる「ペテルブルグ神話」は、ロシアの近代文学の柱であり、したがってロシアの近代的自己表象の重要な核であったと言える。上に引用したのはドストエフスキイの長編『未成年』中の有名な一節だが、このような「消失幻想」のモチーフとともに、前節で西欧派の言説に即して指摘したような「ペテルブルグ」や「ロシア」の「内在かつ超越するトポス」もまた、文学作品等を経由して、近代以降のロシアのネーション意識に強い影響を及ぼした。いうまでもなく「首都」や「祖国」の表象は、「ネーション」が自己イメージを再生産していくなかで、決定的な役割をはたすものだ。

ロシアのネーション意識が、ソ連時代も含めて、西欧のそれと異なっていることは、これまでも多くの研究者によって指摘されてきた<sup>17</sup>。「ロシア人」という「ネーション」は、国家（ロシアが民族原理に基づく国家だったことは史上ない）や理念（ソヴィエト社会主義など）等に対応する「国民」にも、またエトノスや言語に基づく「民族」にも完全には該当せず、かといって「国民」と「民族」とが一致しているものとしても表象されえない（ロシア帝国にもソヴィエト連邦にも、ロシア語を母語とする多数の非ロシア・エスニシティ出身者が存在していた）。それは「国民」と「民族」の二極のあいだを浮遊しつつ、時と場合によって両極のどちらかに近づいたり遠ざかったり、あるいは状況に応じて伸縮したりするようなアイデンティティなのである。

このことを説明する例としてよく挙げられるのは、ロシア語には「ロシアの russian」に相当する形容詞が二種あることだ。「Россия (Rossiia)」すなわち「ロシア」という国名から派生した「российский (rossiiskii)」と、主としてエスニック集団としてのロシアに関して用いられてきた「русский (russkii)」とである。しかし後者がロシアの古称である「Русь (Rus')」を語源としていることもあって、両者の別は必ずしも明確ではなく、その守備圏も時代によって変化してきた。また「民族」に相当する語も「нация (natsiia)」「национальность (natsionalnost)」「народ (narod)」などに分かれており、ロシアにおいてアイデンティティを定義することの難しさをよく示している<sup>18</sup>。

このようなロシアのネーション意識と、ゲルツェンやベリンスキイの論考に見られたような「ペテルブルグ」や「ロシア」の「内在しつつ超越する」位相とは明らかに相同的であるが、両者の相関関係を実証的にたどる作業は、残念ながら著者の手に余る。ここでは、19世紀前半の神話的な言説が、1861年の農奴解放令以降、都市

<sup>16</sup> ドストエフスキイ『未成年（上）』（工藤精一郎訳、新潮社、1969年）240ページ。

<sup>17</sup> 近年の論考として、Geoffrey Hosking: Can Russia become a nation-state?, *Nations and Nationalism* 4(4), 1998, pp.449-462; David G Rowley: Imperial versus national discourse: the case of Russia, *Ibid*, 6(1), 2000, pp. 23-42. 等を参照せよ。

<sup>18</sup> 「民族」を表す多様なロシア語の使用史を検討して、ロシアのネーション意識の問題を論じた優れた論考として、Katya Hokanson: Literary Imperialism, and Pushkin's Invention of the Caucasus, *The Russian Review*, vol.53(3), July 1994, pp. 336-352.

化の進行とともに次第に加速したジャーナリズム・出版の拡張と大衆化の過程のなかで、「国民文学」としてより広範な層に受容され、それらが内包していた「内在しつつ超越する自己表象」もまた深く浸透していったという流れを指摘するに留めておこう、もちろんこのような定着・浸透には、新たな出版状況のなかで活躍していたドストエフスキイらが、ペテルブルグ神話や超越するロシアの表象を微修正しつつ、再生産していたことも大きく関わっていた。

このような自己表象の伝統は、ソヴィエト体制下でも基本的には変わることなく、陰に陽に現代まで受け継がれてきたと言える。最後に、現代ロシアにおける「ペテルブルグ神話」「超越するロシア表象」の例として、アレクサンドル・ソクーロフ(Александр Сокуров, 1951-)監督の映画『エルミターージュ幻想 (2002年、原題 *Русский ковчег / Russian Ark*)』<sup>19</sup>に触れておこう。

この映画の主人公は二人の幽霊だ。一人は「キュスティーン」と呼ばれる黒衣の男である。彼は幽霊になってなぜかロシア語を話せるようになっていたが、生前は1839年に数ヶ月ロシアに滞在した経験を基に、ニコライ1世治下の専制政治を糾弾する書を著したフランス人侯爵アストルフ・ド・キュスティーン(1790-1857)であった。もう一人は、自分が生前に誰だったのかを思い出すことはできないが、ロシア人であることだけは確実な男である。彼の姿が画面に現れることはない。カメラ・アングルがそのまま彼の視線であり、彼のセリフはナレーションとして響くからだ。このナレーションは、キュスティーン(1790-1857)の幽霊を「ヨーロッパ」と呼ぶ。

二人の幽霊——キュスティーンとカメラ・アイ——はエルミターージュ美術館の中をいっしょに巡っていくが、歴代のロシア皇帝の宮殿だったこの建物の新しい部屋に入るたび、そこではロシアの歴史の一齣がくり広げられている。二人の前に、エカテリーナ2世やピョートル1世などが現れては消えていく。つまりロシアの過去、歴史的時間が、エルミターージュ美術館という空間の配置に沿って展開していくというのが、この映画の基本的なしくみなのだ。

最後に大広間に行き着いた二人は、そこで繰り広げられている大舞踏会に参加する。それまでは連れのロシア人以外の誰の目にも見えなかったはずのキュスティーンも、ここでは華やかな女性たちと手を取り、向き合って踊ることができる。だがやがて舞踏会も果て、その場にいた人々は広間を去っていく。ロシアの幽霊はキュスティーンに呼びかける。以下に、二人のやり取りを再現してみよう。

**ロシア** (人幽霊の声) 「行きましょう *Пойдемте*」

**ヨーロッパ** (キュスティーン) 「どこへ? *Куда?*」

**ロシア** 「どこへ? 前へ *Куда? Вперед.*」

**ヨーロッパ** 「そこには何がある? *Что там?*」

**ロシア** 「知りません *Не знаю.*」

**ヨーロッパ** 「私は残るよ *Я останусь.*」 (このセリフを間を置いて三度くり返す)

**ロシア** 「さようなら、ヨーロッパ *Прощай, Европа.*」

<sup>19</sup> 2002年、ロシア＝ドイツ＝日本共同制作。カンヌ国際映画祭2002年コンペティション出品。DVD・ISBN:4-87766-526-9 C0874。

ヨーロッパ「……お行きなさい —Идите。」<sup>20</sup>

「ロシア」(カメラ・アイ)は、「ヨーロッパ」を後に残して「前へ」進む。やがて建物の外に出ると、その眼前には(つまり画面いっぱい)灰色の海が広がり、その水面からは霧が立ち上っている。その画面に以下のような「ロシア」の声がかぶさって、映画は終わる。

「あなたがそばにいないくて、残念です。すべてお解りになったことでしょうに……。ご覧なさい、周り  
は海です。私たちは永遠に存在し、そして永遠に生きるのです。 Как жалко, что вас нет рядом. Вы бы все  
поняли... Смотрите – море вокруг. И быть нам вечно, и жить нам вечно.」

原題を『ロシアの箱舟』というこの映画の寓意は明らかだ。エルミタージュはピョートル以来のロシアの歴史を内包し、ペテルブルグというトポスを凝縮した場にほかならない。だが華麗を極めるこの宮殿は、じつは「ロシアの箱舟」のように、カオスの海に浮いているちっぽけなコスモスに過ぎないのだ。「ヨーロッパ」は最後までこのコスモスから出ようとはしない(「私は残るよ」)。西欧文明の粹である建物の外に出て(「さようなら、ヨーロッパ」)、暗く混沌とした海と霧に歩み入り、「永遠」に触れたのは「ロシア」だけだったのである。

「ロシア」は、ラストでこの建物から外に出、「ヨーロッパ」がその中に残った西欧化の精華エルミタージュを取り囲む海と霧へと同一化して、この建物の中ではともに歩んでいた「ヨーロッパ」に対して超越した位相に立つ。いや、そもそも、この映画において「ロシア」は実は、最初から超越していたのかもしれない。カメラ・アイそのものであり、画面上に一貫して不在であるということは、画面上の一切に対して外在しているということ、別言すれば遍在しているということにはほかならないのだから。

このラストシーンは美しくも哀しい。『エルミタージュ幻想』は、西欧の超克やロシア賛美を直接に意図した映画ではない。だがそれにもかかわらず、この映画が「ペテルブルグ神話」「超越するロシア」の構造を基底としていることにこそ、19世紀前半に確立したロシアの自己表象の型の強固さを見ないわけにはいかないのである。

---

<sup>20</sup> 同前より。